菊永　もう一つね。二章の子どもの年中行事にかかわる詩も面白かった。

はたち　「ほおずき市」も面白いですね。〈まっかな実を／じっと見ていると／おでこのあたりから／まあるいきもちに／なってくる〉。まあるいきもちで…。面白いですね（笑）。

菊永　「たね」や「みつばち」もね。〈雨が／しとしととふる朝に／鳥が／落していった〃春がきて／なつかしい山の／花がさく／遠い山にも／花がさく〉（「たね」）日本的な古い抒情だけれども新鮮度の高いさわやかな空間を作り出しているなと。

海沼　次は檜きみこさんの『クケンナガヤ』です。はたちさんどうですか。

はたち　子どものとき、両親が働いている間預けられた場所での人々の思い出を描いているんです。カタカナで「クケンナガヤ」としたところに、何かを思わせる一つの面白さがありますね。預けられていたところのおじさんおばさんが子どもの視線で描かれていて新鮮です。冒頭の「町」から長屋に住む人たちの様子が浮かんできます。今もそんな路地があって一人の少女がいる。そんな現実感もありましたね。

菊永　連作で昭和三〇年から四〇年代の日本のどこにでもあった町の風景が感じられます。子どもとおじさんやおばさんたちの交わりを淡々と描いている。同時に私小説風なのだけれども、べとつかず淡々と流れていて奇妙なリアリティーが魅力。ただ、子ども読者にどれだけ届くかが問題。これは少年詩の書き手の全員の課題ともいえますが。この詩集にも新しい少年詩の試みや方法論があります。そして、間中さんと同じ連作による詩集構成だということに意味があるかな。

海沼　やはり昭和の懐かしさ、人と人との結びつきの温かさがこの詩の良さなのでしょうね。今という時代だからこそそれが強く感じられる。長屋に住む人々の

２００１年～２０１５年 印象に残った詩集１０冊

海沼松世・選

高木あきこ『どこかいいところ』（理論社）
間中ケイ子『猫町五十四番地』（てらいんく）
宇里直子『兎の散歩者』（幻冬舎ルネッサンス）
小林雅子『青銅の洗面器』（四季の森社）
山崎るり子『雲売りがきたよっ』（思潮社）
檜きみこ『クケンナガヤ』（私家版）
高橋忠治『定本高橋忠治全詩集』（小峰書店）
加藤丈夫『仙人』（四季の森社）
江本あきこ『三日月のひと』（てらいんく）
杉本深由起『ひかりあつめて』（小学館）

菊永　謙・選

海沼松世『空の入り口』（らくだ出版）
田代しゅうじ『野にある神様』（てらいんく）
いとうゆうこ『おひさまのパレット』（てらいんく）
間中ケイ子『猫町五十四番地』（てらいんく）
はたちよしこ『いますぐがいい』（長崎出版）
宇里直子『兎の散歩者』（幻冬舎ルネッサンス）
山中利子『遠くて近いものたち』（てらいんく）
三谷恵子『虹のかけら』（てらいんく）
岩佐敏子『ふしぎらんど』（四季の森社）
清水ひさし『かなぶん』（四季の森社）

はたちよしこ・選

島村木綿子『森のたまご』（銀の鈴社）
菊永　謙『原っぱの虹』（いしずえ）
間中ケイ子『猫町五十四番地』（てらいんく）
杉本深由起『漢字のかんじ』（銀の鈴社）
白根厚子『わたしの記憶』（詩人会議出版）
山本なおこ『ねーからはーからごんぱの はしまで』（らくだ出版）
檜きみこ『クケンナガヤ』（私家版）
武鹿悦子『星』（岩崎書店）
清水ひさし『かなぶん』（四季の森社）
西沢杏子『虫の恋文』（花神社）

＊発行年順